

『徒然草摘議』における「老い」の観念
——『徒然草』第7段の理解を中心として——

The Idea of Old Age in "Tsureszuregusatekigi":
Focusing on views on Tsureszuregusa's seventh stage

本 村 昌 文
MOTOMURA, Masafumi

岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要
第45号 2018年3月 抜刷
Journal of Humanities and Social Sciences
Okayama University Vol.45 2018

『徒然草摘議』における「老い」の観念 ——『徒然草』第7段の理解を中心として——

本村 昌文

はじめに

本稿は、『徒然草』の注釈書を素材として、江戸期、とくに17世紀における「老い」の観念の一端を明らかにすることを目的としている。

17世紀に至り、『徒然草』自体の出版が活性化されるとともに、数多くの注釈書が執筆・刊行された⁽¹⁾。『徒然草』に限らず、ある古典注釈書を研究しようとする場合、川平敏文氏が指摘するように、主に①注釈書の分析を通して、その著作自体の成立や解釈を検討する、②注釈書の分析を通して、その注釈が書かれた時代の意識や考え方を明らかにするという二つの立場からの研究がある⁽²⁾。本稿は後者の立場を取り、『徒然草』の注釈書から当時の「老い」の観念を抽出する試みである。

『徒然草』の注釈書を用いて「老い」の観念を検討する理由は、主に以下の2点である。第1点は、川平氏が「つれづれ」の意味を分析し、当時においてこの語は「心身ともに静寂なる状態」と捉えられていたこと、さらにこうした「つれづれ」という語の理解が作品全体の理念として用いられるようになるプロセスおよび同時代の三教一致論との関係性を検討し、「徒然草が儒仏道三教の思想が詰め込まれた、哲学書のごときものとして読まれた」、「すなわち徒然草は、文芸書であるとともに、三教の哲理に通じ、具体的な精神修養を実践するための「思想の教科書」でもあった」と指摘していることである⁽³⁾。17世紀において『徒然草』は単なる随筆、手持ちぶさたの折にとりともなく書かれた書物ではなく、「哲学書」「思想の教科書」に類する書と認識されていたとするならば、『徒然草』の注釈に示された「老い」に関する見解を検討することは、当時の人々の「老い」に対する哲学的・思想的な営みを明らかにすることにつながると考えられる。

第2点は、当時の人々が「老い」を捉えていく際に、少なからず『徒然草』のフレーズをベースにしているということである。例えば、当時よく読まれた仮名草子である『可笑記』には、以下のような記述がある。

それ、定命六十年といへども、まつ十二三までハ、さのミ何事をも弁ぜず、さて廿斗の程ハ、父母兄臣の気をかね、万事思ふやうならず。又六十以後ハ、世間をはゞかり、かへつて、我子の気をもかね、或ハ、目みえず、ミゝきこえず、はもうごきいたミ、手足かなはず、心脉おとろへ、腎水かひき、脾胃きよそんじ、日々にうれへかさなり、月々に後悔のミ数そひはべる。

……長命何のゑきか有、命ながければ、はぢ多し、人ハたゞ四十にたらぬ程にて、しなんこそよけれと吉田の兼好もいへり。⁽⁴⁾

ここでは、60歳を超えると人間関係に気を使い、肉体的にも精神的にも衰え、心配事や憂鬱なことが積み重なっていくというように、「老い」がネガティブに捉えられている。こうした「老い」を否定的に捉える根拠として、傍線部のように『徒然草』（第7段）の一文が引用されているのである。後述するように、『徒然草』第7段は単純に「老い」を否定するのではなく、人間の寿命には定めがないという「無常」について理解せず、自己の生命に執着することの愚かさを述べていたのであるが、そうした文脈から傍線部のみを切り取ることで、「人は40歳になる前に死んだ方がよいのだ」というように、「老い」を否定する言説として機能するようになるのである。

また、当時の上層農民で酒造業も営んでいた河内屋可正は、老人を嫌悪する若者たちの風潮に対し、以下のように述べている。

如此の者共の云、老人程いやなる者ハなし。六ヶ敷物也。若きどうし遊ぶこそ面白けれとて、ひそかに不善のたはぶれをなす者に、一人も身の治る者ハあらじ。予が若かりし時も、一往ハ老人をいとひし事有しが、皆無分別故也かし。今老人の云しことをつくづく思ひ出るに、身に入てゆかしき事多し。いとひすつる事なかれ。あがめて用ゆべし。古人の云、老て智のわかき時にまされる事、わかくしてかたちの老たるにまさるがごとしと書れたり。⁽⁵⁾

自分も若いときは老人のことを厭い嫌っていたが、いま思い起こしてみると老人の言っていたことが身に染みて聞きたいと思うことが数多くあるので、老人のことを尊ぶべきであるという。その根拠として、『徒然草』第172段にある一文を引用するのである⁽⁶⁾。

以上のように、「老い」や「老人」を否定的に捉える、また肯定的に捉える際に、『徒然草』のフレーズが活用されている。以上のことをふまえると、17世紀において、「老い」を捉える意識のベースには『徒然草』にみられる「老い」の捉え方があったと考えることができるのではないだろうか⁽⁷⁾。とりわけ、『徒然草』第7段は、一見すると「老い」を否定し、早死を肯定するかのよう理解されうる可能性のある章段であり、注釈書においても多様な解釈が示されている。

以上の点をふまえ、本稿では『徒然草』の注釈書をもとに「老い」の観念を検討する一助として、『徒然草摘議』という書物を取り上げたい⁽⁸⁾。『徒然草摘議』は、貞享5年（1688）に刊行された書である。著者は山崎闇斎に学んだ朱子学者・藤井懶斎（寛永5年・1628～宝永6年・1709）である⁽⁹⁾。同書の執筆意図については、本書の冒頭に以下のように述べられている。

その作れるつれつれ草の得失、わか輩の議すへきにハあらぬを、しゐて今議せむとするは何そ

や。わか太郎なる子、此ころわつらふ事侍てしはらく経業にたゆミ、ただつれつれ草をなむ枕のもとにひらきをけり。我これを見てひそかに思ふに、このふミ、詞うるハしく心おかしけれハ、世の人のもて興するもことハりにハ侍れと、初学のともがらにおゐてハよまてもあらなんとおもふ所多し。よりて今さる章段をつミて愚意にまかせてみたりに議す。

自分の子どもが病になって経書に関する勉強をしばらく怠っている間、その子は『徒然草』を枕元でひらき読んでいた。それをみて、『徒然草』は世の人が高く評価するものの、初学の者にとっては読まない方がよい箇所もあるため、その箇所について自分の見解を述べるというのである。同様の主張は、懶斎の作成した『閑隠筆記』にも「俗士皆兼好ガ徒然草ハ、乃吾邦ノ論語ナリト。若然バ兼好ハ是、日本ノ孔子歟。未審。從來幾人カ斯書ノ為ニ所誤。然ドモ一書尽人ヲ誤ベシト謂ニハ非。只其去取スル所ヲ識ベキ而已。余窃徒然草摘義二卷ヲ著ス。略鄙意ヲ述ブ」というように⁽¹⁰⁾、世の人が『徒然草』を我が国の『論語』に相当すると称賛することに対して、『徒然草』によって過ちを犯した人が数多くおり、『徒然草』のなかで取捨選択すべき箇所があることを『徒然草摘議』で述べたといっている。

以上のように、『徒然草摘議』は『徒然草』という書物には人々を誤らせる内容があるため、取捨選択すべきことが述べられているといえる。これまでの研究においても、『徒然草摘議』は単なる『徒然草』の注釈というよりは、僧侶や仏道、好色の是認、内容の論理的矛盾などを批判した書として捉えられてきた⁽¹¹⁾。しかし、当時の「老い」に関わる意識を本書から検討する研究はいまだなされていない。そこで、本稿では「老い」を否定的に捉えていく形で理解されうる『徒然草』第7段に関する『徒然草摘議』の論評を中心に検討し、当時の「老い」をめぐる意識の一端を明らかにしたいと考えている。

1、「天下晩成の利器」

具体的な検討に入る前に、まず『徒然草』第7段の内容について確認しておきたい。当該箇所の全文は、以下の通りである。

あだし野の露消ゆる時なく、鳥部山の煙立ち去らでのみ住み果つる習ひならば、いかにもものあはれもなからん。世は定めなきこそいみじけれ。命あるものを見るに、人ばかり久しきはなし。かげろふの夕べを待ち、夏の蟬の春秋を知らぬもあるぞかし。つくづくと一年を暮すほどだにも、こよなうのどけしや。飽かず、惜しと思はば、千年を過すとも、一夜の夢の心地こそせめ。住み果てぬ世にみにくき姿を待ち得て、何かはせん。命長ければ辱多し。長くとも、四十に足らぬほどにて死なんこそ、めやすかるべけれ。そのほど過ぎぬれば、かたちを恥づる心もなく、人に出で交らはん事を思ひ、夕べの陽に子孫を愛して、さかゆく末を見んまでの命あ

らまし、ひたすら世を貪る心のみ深く、もののあはれも知らずなりゆくなん、あさましき。⁽¹²⁾

冒頭で「あだしの野露」、「鳥部の山の煙」が消え去ることなく、永遠に存在し続けたらならば、「もののあはれ」ということもないだろうという一文からはじまり、人間の寿命には定めがないこと＝無常であることを称賛する。そして、いつまでも住み続けることのできない世の中で、老いて醜くなった姿をさらしていったいどうしようというのか、長生きをすればするほど恥をかくことが多いのであるから、たとえ長生きをしたとしても40歳にならないうちに死ぬのがよいのだという。一見、これは早死にを奨励しているようにみえるが、その後に続く文章—40歳を過ぎると容貌を恥じる気持ちもなくなり、人との交流ばかりを求め、子孫を溺愛して、子孫が成長していくのを見届けたいと自分の名誉や利益に執着するようになる—をふまえると、この段は人間の寿命には定めがないこと＝「無常」を理解せず、自身の生命、名誉、利益に執着する生き方の愚かさを述べた一段ということができらるだろう。

以上のような内容をもつ『徒然草』第7段全体について、『徒然草摘議』では「此段又莊周がよだれをねぶれり」と『莊子』の思想を根幹にしたものと捉えている。そのうえで、「命なけれハ辱おほしといひてやミぬ。年数をかきるまでハなし。兼好人ミな四十にたらでしなん事をねかへり。これ何の義そや」と『莊子』では40歳という年齢に関する指摘がないことを述べ、なぜ兼好は40歳で死んだ方がよいと言ったのかと問題を提起することから筆を起こしていく。

『徒然草摘議』における第7段の捉え方の第一の論点は、「天下晩成の利器をむなしうする」というものである。『徒然草摘議』では、40歳を越えてなされた事跡を列举し、40歳にならないうちに死を迎えることの危うさを指摘する。

瞿曇もし四十二たらて入滅せられバ、未顕真実にてやまん。老子もしよそちにたらて死せられハ道德経もあらし。仲尼ミつからのたまふ四十にしてまとはずと。孟子ミつからいへらく四十にして心をうこかさずと。もし此時にだにをよハてかくれさせ給ハハ後代何をかのべん。……

釈迦が40歳で死んでいたら仏法の本質を説き明かさないうちになっただろうし、老子が40歳で死んでいたら『老子道德経』も存在しなかつただろう。孔子は「40歳になって心が惑うことがない」と述べ、孟子は「40歳になって心が動揺しない」と述べているが、40歳より前に死んでいたら、こうした発言もなされなかつたというのである。このように、懶斎は儒教・仏教・老荘思想の創始者の事跡に注目し、40歳になる前に死んでいたら、それらが成し遂げられなかつたことになるとし、「老い」を肯定的に捉えていくのである。

この点に関わって、『徒然草摘議』では、「ある註にいはく、兼好の此説四十にして悪まれハそれ終んならくのミと聖人のたまひしに近しと」と、『論語』陽貨篇にある「子曰、年四十而見惡、其

終已。（40歳になっても人に憎まれるのは、それで終わりだ）」の一文との類似性を指摘する注釈に言及し、「是誠に牽合附會なり。聖人ハ人の時に及て善にうつらん事をすすめ給へり。四十の後ハいきて益なしとのたまふにハあらず」と、その注釈を退けている。

『徒然草』第7段のこの箇所を『論語』陽貨篇と関係づける理解は、林羅山の『野槌』に淵源がある。『野槌』では、以下のような注釈がなされている。

見にくき姿 老をとろへたるをいふ。いのちながければ 莊子天地篇、多男子則多懼、富則多事、壽則多辱、是三者非所以養徳也。四十にたらぬほどにて 論語子罕篇、四十五而無聞焉、斯亦不足畏也已。陽貨篇、年四十而見惡焉、其終也已。⁽¹³⁾

羅山の付した「見にくき姿」と「いのちながければ」の注釈は、羅山の注釈に先行する『徒然草』の注釈の嚆矢である『徒然草寿命抄』の解釈と共通している⁽¹⁴⁾。この点をふまえると、「四十に足らぬほどにて」に付された注釈は、『徒然草寿命抄』にみられない、羅山のこだわりの現れた内容を有するといえるだろう。

「四十にたらぬほど」の箇所について、羅山は『論語』子罕篇の「後生可畏也。焉知来者之不如今也。四十五而無聞焉、斯亦不足畏也已矣（年若い者は恐るべきだ。若者が今の私に及ばないことなどありえようか。40歳、50歳になっても評判がたたないならば、それは恐れるに足りない）」と陽貨篇の「子曰、年四十而見惡、其終已。（40歳になっても人に憎まれるのは、それで終わりだ）」を引用し、それをもとに理解することを促している。これは一見すると、単に「四十に足らぬほどにて」という語句の出典を示しているにすぎないとも考えることもできる。しかし、羅山が『論語』解釈をする際に参照した朱熹の『論語集注』の注釈をみると、羅山なりの意図がみえてくる。まず子罕篇の注釈からみてみよう。

孔子言後生年富力彊、足以積学而有待其勢可畏。安知其将来不如我之今日乎。然或不能自勉、至於老而無聞、則不足畏矣。言此以警人、使及時勉学也。（孔子は、自分より後に生まれた者が年々豊かになり、力が増し、学問を積み重ねて頼みにするに十分であれば、その勢いは畏れるに値するが、しかし、自ら勉学に励まず、老いに至っても名声を聞くことがない場合は、畏れるに値しないということをいったのだ。以上のことを述べて人を戒め、時機を失しないように勉学に励ませたのである）⁽¹⁵⁾

ここでは、年少の者が若いときから学問に励み、自分の頼みとするような存在になる場合と学問に励まず老いても名声が得られない場合とをあげて、時機に応じて学問に励むことの重要性を説いている。

次に陽貨篇に対する朱熹の注釈をみてみよう。

四十、成徳之時。見惡於人、則止於此已。勉人及時遷善改過也。(四〇歳とは徳を完成させる時節である。この時に人に憎まれれば、それで終わりだ。人に時機を逃さず、善に移り過ちを改めることにつとめさせたのだ)⁽¹⁶⁾

朱熹は40歳という年齢が自己に備わる徳を完成させる時期であると述べ、そのときに人に憎まれてしまえば、その段階でとどまってしまい、徳の完成には至らないといっている。そのため、孔子は時機に応じて善を実践してあやまちを改めるよう励ましたのだと解釈する。子罕篇の注釈とほぼ共通する内容がここにも述べられているといえよう。

『論語』子罕篇の文章は、『野槌』において『徒然草』第151段の「或人の云はく、年五十になるまで上手に至らざらん芸をば捨つべきなり」という一文の「年五十になるまで」の箇所注釈にも、「わかきはつとむべし。老たりともすつべからず。燭なくて夜るゆかんは危からずや。聖人の四十五十にして道きく事なき物をいましむる事は時々及で学をすすむるの教誨なり」と引用され⁽¹⁷⁾、朱熹の注釈をふまえて、若いときにも老いたときにも時機に応じて学問に励むことの重要性が述べられている。以上の検討をふまえると、羅山は「四十に足らぬほどにて」の箇所について、若いときから時機に応じて学問に励み、40歳になったら徳が完成するように努力すること、換言すれば40歳になっても徳が完成しなければ人間的にはそれまでの存在になってしまうと理解するように『論語』子罕篇と陽貨篇を引用したと考えることができるだろう。

『徒然草摘議』の主張も「聖人ハ人の時に及て善にうつらん事をすすめ給へり」というように、朱熹『論語集注』をふまえてなされていることから、羅山の『野槌』を直接批判しているわけではない。しかし、注目しておきたいことは、『野槌』と『徒然草摘議』との注釈内容の相違である。

羅山の注釈では、40歳という時期が徳の完成と捉えられ、その時期までに時機に応じた学問に励まないと徳を完成させられなくなると理解されている。そのように徳を完成させられないならば、40歳で死んだ方がよいということになるというように、この箇所において、羅山は40歳になるまでに時機に応じて学問に励むことの重要性を指摘している。以上の羅山の注釈では、「老い」ではなく「若きとき」の方へ意識が向けられている。それに対して、『徒然草摘議』では40歳に至るまでの学問のあり方ではなく、40歳以降に成し遂げられる事跡の重要性に目が向けられているのである。すなわち、『徒然草摘議』においては、「老いてから成し遂げられる事跡」を評価するというように「老い」を肯定的に捉える意識がみられるのである。

また、『徒然草摘議』では、「兼好のこの説聖賢をもていはず。ただ常人につきていへるのミ」と、優れた聖賢について述べたのではなく、一般の人々について述べた箇所と捉え、以下のように述べている。

しかれとも常人なればとて四十にたらてミナ死せば世にいくはくの人が残らん。其うへわかき比常人とみえて年たけてする人なきや。たとへハ漢の高祖布衣にしてその父なにがし仲がつとめたるにしかずといへりし比、たれか高祖を常人にあらすとおもはん。わか国の豊臣秀吉公も、草かりておはせし時、誰か天か下しるへき人とハ見ん。是ほとこそなければともわかくて常人とも見えて後に、国家のたすけとなりし人世におほし。浮屠の中にハことに三十にもあまりぬるまで破戒無慙の凡僧なるか、四十の後道心ふかく自利利他の善知識とあふがる人いくらありし。これらミナ四十にたらて死せしめん事おしからすや。

ここでは、漢の高祖、日本の豊臣秀吉の例をあげ、40歳以降に国家の助けとなるように人物になった例をあげ、40歳以降に優れた人物として功績を残すことがあることに言及する。とくに注意しておきたいことは、他の段では仏教者の批判を行いながら⁽¹⁸⁾、この箇所では批判の対象となる仏教者であってさえも40歳以降で優れた人間性を発揮する者もいるというように、『徒然草』の見解を批判する根拠として活用している点である。朱子学者であり、仏教を批判する立場を取る懶斎にとって、仏教者を根拠として持ち出してまで、この第7段の見解を批判する姿勢をみると、この第7段の内容が懶斎にはどれほど誤ったものであると見えていたか、想像するに難くない。

以上のような人間性に関する主張と関連して、『徒然草摘議』では「忠」と「孝」という観点からも言及がなされる。

古人ハ四十にして始てつかふ。今ももし古のことくならハ、人ミなつかへすして死して君に忠するの道ハたえむ。人の子十歳にもあまらされハ、よく父母につかふる事をしらす。父母ミなよそちにたらてしなハ、子いつの程にか父母にハつかへん。しからハ世に孝道もたえむ。かかるひがひがしき教あるにより世の人つとむへきわさをもつとめす。もはら無常をのミいひおもひミそちにもあまりぬれハ、君父をすて妻子になげかせて、世をのかる人すくなからす。又わかくて病ある人もこの詞を口にしきて、養生をよくせではやく死して親に物をおもハするも有りけり。つらつら思ふに、兼好のこの説、たゝ天下晩成の大器をむなしうするのミにあらず。大きに忠孝の道に害あり。尤もおそるへし。

『礼記』にみえる仕官の年齢をふまえ、『徒然草』第7段の通りに40歳になる前に死んだ方がよいということになれば、万人が仕官しないうちに死ぬことになってしまい、君への「忠」というあり方が失われてしまうことになる。また、父母も40歳にならないうちに死ぬことになれば、子どもが親に仕えることができなくなってしまい、親への「孝」というあり方も失われてしまうことになる。『徒然草』第7段のような誤った教説があることによって、世の人はなすべきことをなさなくなり、

ひたすらこの世は「無常」であるとばかり考え、30歳を過ぎる頃になると、主君や父親、妻子をすてて、遁世する人が少なくない。そのうえ、若くして病気になった者のなかにも、この『徒然草』第7段の言葉を口にして、適切な療養もせず、早死にして親を嘆かせる人がいるということを述べ、「天下晩成の大器」（年を重ねて成し遂げられる事跡と人間性）のみならず、「忠」と「孝」の実践に弊害があるというのである。

さらにここで注意しておきたいことは、「もはら無常をのミいひおもひ」というように、『徒然草』第7段の教説によって人々が「無常」ということばかりに専心するようになると述べている点である。この第7段を「無常」について述べた箇所と捉える見解は、例えば、17世紀中葉に執筆・刊行された注釈にみられる。

此段の大意ハ、仮にも無常を知らぬ貪欲の人をいましめ、いきとをりてかける成へし。（『徒然草新註』）⁽¹⁹⁾

此ノ段ハ人長命ナレバ無常ヲ忘レテ、モノノ哀レヲシラズ、貪欲フカク慈悲スクナクナルモノナレバ、只ハヤク死ナンニ不如トノ心ナリ。（『徒然草文段抄』）⁽²⁰⁾

「無常」を理解しない者への戒め、「無常」を理解するために早く死ぬことの推奨として第7段を理解する注釈が『徒然草摘議』に先行して刊行されていることをふまえると、「もはら無常をのミいひおもひ」という一文には、このような『徒然草』第7段を「無常」を述べた箇所と捉えていく注釈への批判もこめられていると考えることもできるだろう。

以上のように、『徒然草摘議』では、「天下晩成の大器」（年を重ねて成し遂げられる事跡と人間性）と「忠」・「孝」の実践という視点から、「老い」を否定する『徒然草』第7段の一節を批判し、「老い」を肯定的に捉えようとしていくのである。これは、いわば「老い」の生き方とでもいうべき視座からなされる主張であろう。

2、「老い」の容姿の肯定

二つめの論点として注目したいのは、『徒然草摘議』では、「老い」の生き方に加え、身体的な容姿についても言及していることである。

兼好又老て姿の見にくゝなるをまたじと云もこゝろへがたし。大抵人はおさなきハおさなき形よし、おさなくて年たけたるありさまハにげなし、老たるハ老たる形よし、老てもしわかくうるハしきかほばせあらハ、それそことやうにてかへりてみくるしからん。三老五更姿見にくしとていにしへの明主やしなはずやハありし。

ここでは、『徒然草』第7段の「住み果てぬ世にみにくき姿を待ち得て、何かはせん」という一文に対して批判をしている。人は幼いときは幼い姿・形がよいのであり、幼いの年に取ったありようをしているのは似合わない。それと同じように、老いた人には老いた姿・形がふさわしいのであり、老いているにもかかわらず若く麗しい容貌をしているならば、異様であってむしろ見苦しいというのである。

『徒然草』の注釈書において、第7段の「みにくき姿」の箇所を老い衰えた姿を意味すると捉える解釈は、『徒然草』注釈の嚆矢である『徒然草寿命院抄』に「ミニクキ姿 老衰シタルスカタ也」と注されて以降⁽²¹⁾、当時においては一般的なものとなっている。また、こうした老いによってもたらされる身体的な衰えは、先にみた『可笑記』にあるように否定的に捉えられる傾向があった。これに対して、『徒然草摘議』では、「老い」には「老い」にふさわしい容姿があることを述べ、「老い」の価値を肯定しようとしているのである。

以上の『徒然草摘議』の主張が当時においてどれほど説得力があったかは定かでなく、むしろ衰えていく身体、容姿を嘆くことが一般的であったと捉えることが自然であろう。ここで注意しておきたいことは、『徒然草摘議』の主張が説得力をもったか否かということよりも、『徒然草』の注釈書群のなかで、このように「老い」の身体的な要素について肯定的な捉え方をするのは、『徒然草摘議』の特色と考えられるという点である。

そもそも、先に挙げた林羅山の『野槌』では40歳に至るまでの時機相応に学問に励むことが説かれ、「老い」そのものを主題化していなかった。その後の注釈では、先に検討した『徒然草新註』『徒然草文段抄』にみられる「無常」を中心に捉える解釈に加え、以下のような注釈がみられる。

若時よりあだに日を暮す人の上にていふ也。儒仏にわたりて勤むべき事の有る人の手前にていふには非ず。始めは人の満足をしらせ、爰に至りては無用の人は四十より内に死したがよき也。⁽²²⁾

ここに引用したのは、『徒然草』の諸注釈をまとめた『徒然草大全』（高田宗賢、延宝5年・1677刊行）にみられる見解である。『徒然草大全』によれば、この第7段は若いときから学問に励まず無駄に生きている人について述べた箇所であり、役に立たない人間であれば40歳にならないうちに死んだ方がよいということを主張しているという。ここでは、人間の生き方、とくに若いときの生き方が主題となっているのであり、「老い」自体に焦点が当てられているわけではない。

また、仏教の教説をベースとした注釈書である『徒然要艸』（1688年～1704年頃成）では以下のような注釈がなされている。

若兼好の伝がごとくならバ、世中の四十に過し人はくびをもくゝり、身をもなげて死すべきやと云時、さにハ非ず、四十に過たらん人ハ死したるもの、おもひになりて、此世の事にかまハで心静に只後世のいとなミにて明し暮せとなり。……兼好の心ハ生を愛して死をにくミて長命をのミ願ふ事ハよからぬ事といひのべ、もし長命ならば四十にたらぬ程にて世をのがれよと云心也。たゞ老たる人は物にかまハで死したる人の思ひになりて引こもり人にもまじハラで念仏して仏の来迎を待べき也。かゝる人のいきのびたらんは徳をつむと云物なるべし。⁽²³⁾

ここでは、『徒然草』第7段の通りであれば、世の中の人々はみな、40歳を過ぎたら首をくくり、身投げをして、死ななければならないということになってしまうが、ここではそういうことを述べているのではないという。40歳を過ぎた人は、死んだ者の思いになって、この世のことに執着せず、心を平静に保ち、よりよい来世のことを希求して生きるということを描いているというのである。ここでは「老い」に焦点があてられているが、それは「老い」の身体的な要素に関わる内容ではなく、よりよい死後を迎えるための「老い」の生き方という内容であり、論点は「老い」よりも、むしろ「死」「死後」に向けられている。

以上の『徒然草摘議』の解釈の背後には、人間のライフサイクルを以下のように捉える意識があると考えられる。

人も亦如是生れいでて日々夜々にひととなり、腹ばひしたちあがり一足づつありき。三歳五歳十歳なをなを成長し、廿歳なれば大人となる。卅歳ハ盛なり。四十よりおとろへ五十になればいよいよ老ぬ。六十にをよべば面しはミ髪白く耳目うとく腰かがまりて漸々におとろへかハる。⁽²⁴⁾

『徒然草摘議』では人間は生まれてから成長し、30歳で人生の絶頂期を迎え、40歳から衰えがはじまり、50歳になるとさらに老いて、60歳に至れば顔にしわはより、髪は白くなり、聴力・視力は衰え、腰は曲がってきて、ますます衰えていくというように人間の一生を描いている⁽²⁵⁾。このように「老い」は人生の下降線であるという理解のもとに、40歳以降に来るべき「死」について思いをめぐらし、よりよい死後を希求する生き方が説かれているのである。

以上のように、『徒然草摘議』では「老い」には「老い」にふさわしい容姿があることを述べ、「老い」をポジティブに捉えていこうとする。しかし、このことは「老い」自体を手放しで賛美することを意味しているわけではないことに注意しておきたい。懶斎は、『閑叢筆記』のなかで、以下のようなエピソードを描いている。

富家翁年八十、余二問テ曰、老テ貪生是惑乎。余ガ曰、然リ。先輩有言曰、衣敝則欲新之。年

類則不欲舍之。達於用物恤用我。不知天地視我亦敝衣類耳ト。由是思之、苟ニ賢者能者凡世ニ有補者ニ非シテ、強生ヲ貪ハ乃惑ナリ。敝衣其勿恤焉。翁惘然タリ。⁽²⁶⁾

ここで懶斎は、80歳を過ぎたお金持ちの老人が「年老いて自分の生命に執着するのが、心の惑いであるのか」と尋ねるのに対して、破れた衣服を新しくしようと思うのに、年を取り衰えた者を捨てようと思わないことは、この天地の働きが人間の存在と衣類とを等しくしていることをわかっていないという先人の主張をもとに、優れた人間で世に益ある者でなければ、自己の生命に執着するのは心の惑いであると答えている。このように、懶斎は「老い」を手放して賛美するわけではない。

「賢者能者凡世ニ有補者」でなければ、自分の生命に執着するのは心の惑いだという主張は一見すると厳しいものに受けとめられるが、「老人ハ血氣おとろふる故に心むさぼりやすし、いましめてむさぼらざれとのミ也。さればよく警戒してわつかにも理もて気にかつことをしる人ハ、おほやうハむさぼらす、よろつただ人による事」(『徒然草摘議』)というように、そもそも老人は自己を構成している「血氣」が衰えてきているために貪欲になりやすい傾向があるため注意をはらう必要があること、自己に備わる「理」によって「気」をコントロールすることをわかっている人は自己の生命に執着することもないと説いていることをふまえると、朱子学の教説をもとに自己の生を全うしていくことを主眼しているといえることができるだろう。

この点に関わって、『徒然草』第93段に対する懶斎の理解をみておきたい。『徒然草』第93段は、牛を売る人に対し、買う人は明日牛を買い取るといったところ、牛はその夜のうちに死んでしまったというエピソードをもとに、人間の生と死について話が展開していく段である。

また云はく、されば、人、死を憎まば、生を愛すべし。存命の喜び、日々に楽しまざらんや。愚かなる人、この喜びを忘れて、いたづかはしく外の喜びを求め、この財を忘れて、危うく他の財を貪るには、志満つ事なし。生ける間生を楽しまずして、死に臨みて死を恐れば、この理あるべからず。人皆生を楽しまざるは、死を恐れざる故なり。死を恐れざるにはあらず。死の近き事を忘るるなり。もしまた、生死の相にあづからずといはば、実の理を得たりといふべしと言ふに、人いよいよ嘲る。⁽²⁷⁾

以上のような人間の生と死について語る段について、懶斎は以下のように述べている。

ひそかに思ふに、生死ハ昼夜晦明のごとし。出ていらざる日あらめや。ミちてかけざる月あらめや。ただ是人の常にしあれハ、生もかならずしも日々にたのしむべきにあらず。死もかならずしも恐れおののくべきにあらず。……此段あながちに生をたのしめ死をわするなど教るもうけられず。ただまさにくべくしていき、しぬべくして死して常なれとぞいはまほしき。

懶斎は生と死は昼夜の変化と類比しうる現象であり、生と死にそれぞれ価値づけをする必要はなく、あるべき生を全うし、死すべきときに死を迎えるということの重要性を述べている。こうした死生観の背景には、

夫人物者、天地造化之氣二成。氣伸而息トキハ生。屈テ消トキハ死。只是一氣之衆散爾。散而返於其初。故二曰厚始反終。又曰、鬼者歸ナリ。但其歸ナリ。盖君子小人不能無些別。君子ハ許多ノ道理ヲ尽得而斃。故二直与天地同其化。小人ハ私意人欲死ニ至マデ不レ衰。割捨シ不レ断。其氣為之滯結シテ不散。甚則為厲。⁽²⁸⁾

というように、人間の生と死を「氣」の凝聚と散滅で説明する朱子学の「氣」にもとづく考え方がある。先述したように、「老い」も「氣」の衰えと理解されていることをふまえると、「氣」の自然なありように逆らって生を求めるようなことは、人間の理想的な生き方に反するものである。こうした「氣」にもとづく生のあり方が「老い」の捉え方にも反映されているということができるだけう。

3、夭逝する人への救いという解釈をめぐって

第3の論点は、『徒然草』第7段を夭逝する人の救いを提供すると捉える注釈に対する『徒然草摘議』の見解である。この第7段を夭逝する人の救いという立場で注釈するのは、加藤盤斎（寛永2年・1625年～延宝2年・1674年）である。盤斎は松永貞徳（元亀2年・1571～承応2年・1653）に師事した俳人、歌人であり、『新古今和歌集』、『伊勢物語』、『枕草子』などに注釈をつけている。『徒然草』の注釈としては、寛文元年（1661）に刊行された『徒然草抄』がある。この書のなかで、盤斎は第7段について以下のように述べている。

四十にしてはじめて仕ふとて、君に奉公するも、四十よりなるに、四十の後は用なきよしはいかかといへり。それは此段をよくしらぬ故也。此段はわかき人の死には、長命をこのむな、長命はかかる失損があるといひて死を満足させ、老いぬる人にはかかるそんがあるほどにこころへて、世をわたれといましめたり。⁽²⁹⁾

盤斎は、若くして死を迎える人に対して長生きにはマイナス面がある（この世が無常であることを理解せず、自己の生命に執着する）ことを説くことで自身の死を納得できるようにし、老いた人には「老い」にはマイナス面があることを理解して生きていくことを説いた箇所と理解している。このような若くして死を迎える人に自身の死を受けとめさせるという意を第7段に読みこむのは磐

斎の注釈が嚆矢である。さらに、こうした理解は『徒然草』の章段構成に大きな影響を与えた北村季吟（寛永元年・1624～宝永2年・1705）の『徒然草文段抄』（寛文7年・1667年刊行）にも受け継がれていく。

此段は人長命なれば無常を忘れてものの哀もしらず、貪欲ふかく慈悲すくなる物なれば、只はやく死なんにはしかじとの心也。扱世に早世する人も此理をよく心得てさのみ悔ゆまじき事なり。⁽³⁰⁾

以上のように、『徒然草摘議』に先行して、17世紀中葉に第7段を夭逝する人の心の救いとして理解する注釈が登場し、一定の影響を有していたと考えられる。

以上のような注釈に対して、『徒然草摘議』では以下のように述べている。

一註にいはいく、よそちの死の事ハをよそ人ハ長命をこのまされ、長命ハかかる損失ありといひて、わかき人の死せんにその死を満足させんため也。我おもへらく、わかくて死ぬる人は満足もすへし。

ここで引用されている「一註」は、先にみた磐斎の『徒然草抄』と考えてよいだろう。磐斎の『徒然草抄』にみられる夭逝する人が自身の死に納得がいくようにするために書かれたと捉える理解に対して、『徒然草摘議』では「わかくして死ぬる人は満足もすべし」といったんは肯定的に受けとめる。そのうえで、次のように続けていく。

しなぬ人の此教によりて身をあやまるをいかがすへきや。身をあやまるとはいかに。三十にもあまりぬれハ、恩ふかき君にそむき老いたる親にもつかへず、心にまかせて身をはふらして四十にたられて死なん事をおもふ。さりとて必しにもやらねハ、終にハ不孝不忠不義放埒の人と成て、置所もなかるへし。是身をあやまるにあらずや。

「死なぬ人」＝夭逝しない人がこの第7段の教説によって間違った生き方をしてしまうのはどうしたらよいのかと問題を展開していく。第7段の教説によって間違った生き方をするというのは、懶斎によれば、主君に背き、老いた親の面倒をみることもせず、気ままに勝手な生き方をして、40歳にならないうちに死のうと考えるようなことである。このように自分勝手な生き方をして40歳で死んでしまえばよいと考えても、必ず40歳に死ぬとは限らないので、40歳を過ぎても生きていき、最終的には「不孝不忠不義放埒」というような人間になり、身の置きどころもなくなってしまうのではないかというのである。

ここで注意したいことは、懶斎が若くして死を迎える人について関心を向けているのではなく、若いときに気ままに生きた人間が40歳を過ぎていかに生きられるのかというように、若いときの生き方に関心を向け、若いときの生き方が老いてからの生き方へと影響を及ぼすことに注意を喚起している点である。若いときの生き方を戒める立場からなされる注釈は、『徒然草摘議』の他にもみられる。例えば、『徒然草』の諸注釈をまとめた『徒然草大全』では、以下のように述べられている。

長命なれハあしきと一篇に心得つるは此の段の本意にあらず。不学愚癡のやから、長命の益なくして却て辱おほき事如此。能々心得て、長生をたもつべし道なり。然に不孝の族、親の長命をうるさくおもふかたふどに此所を口すさひとなすは、注釈あしく取りなしたる失なり。改むへし。⁽³¹⁾

長生きがよくないとこの第7段を捉えることは、この段の本意を理解したということにはならない。この段で言いたいことは、学問をせず愚かな人間は長生きをしてもよいことはなく、むしろ恥をかくことが多いということである。この点をしっかりと理解して、長く生きることを目指すように説いていくのである。

以上の『徒然草大全』の注釈でさらに注目しておきたいことは、後半部分の主張である。『徒然草大全』では、この第7段を根拠として親の長生きを面倒なことと思う人々が存在しており、そうした立場でこの第7段を利用することに警鐘を鳴らしている。『徒然草大全』は延宝5年（1677）に刊行されており、この点をふまえると、17世紀後半において、『徒然草』第7段をもとにして親の長生きを否定、面倒に思う人々が可視化されはじめたと推測することができよう。もちろん、親の長生きを面倒に思う人が17世紀後半に突如してはじめて現れたということではないが、少なくとも『徒然草』の注釈書を時系列にみていくと、17世紀後半に刊行された『徒然草大全』においてはじめて以上のような見解が示されているのである。17世紀後半において、『徒然草大全』の作者の眼には、第7段の長生きを否定するかのように理解されうる内容をもとに、親の長生きを否定する人々の姿が映っていた。以上のことは、17世紀後半の人々の意識を考えるうえで注目しておく必要がある。

『徒然草摘議』は『徒然草大全』の刊行から11年後に刊行、また「孝」の実践者の伝記を集めた『本朝孝子伝』は貞享2年（1685）に刊行されている。先に検討したように、懶斎は「忠」・「孝」の実践という観点から『徒然草』第7段の有する誤謬を指摘していた。こうした点をふまえると、懶斎の主張の背景にも、『徒然草大全』と同様に親への「孝」をめぐる社会的な状況を考慮に入れておく必要がある。

親の長生きを面倒に思う意識、また親への「孝」をめぐる社会的状況に関連して、ここであらためてはじめに引用した『河内屋可正旧記』の資料を再掲したい。

如此の者共の云、老人程いやなる者ハなし。六ヶ敷物也。若きどうし遊ぶこそ面白けれとて、ひそかに不善のたハぶれをなす者に、一人も身の治る者ハあらじ。予が若かりし時も、一往ハ老人をいとひし事有しが、皆無分別故也かし。今老人の云しことをつくづく思ひ出るに、身に入てゆかしき事多し。いとひすつる事なかれ。あがめて用ゆべし。古人の云、老て智のわかき時にまされる事、わかくしてかたちの老たるにまさるがごとしと書れたり。⁽³²⁾

この資料では「如此の者」たちが老人を嫌悪し面倒くさい存在と捉え、若い者同士でいることを賛美する風潮が述べられている。この「如此の者」たちがもたらす風潮は、この前文にある以下の資料をみると明確になる。

乱れたる世には、狼藉乱妨ひが事を犯すともがらおほければ、すゞろなるくるしミをうけたる事共、書伝へ云伝へたり。若左様の世にも生れあひなバ、いかばかりかなしからん。然るに当時ハ太平の御代なれば、久堅のあめすなほに、あらがねのつちゆたかにして、君臣の礼義おもくましませば、父子ハ孝をつくす、旅人ハ往來を自由にし、たみのくわほこる村里ハ枕を泰山のやすきに置事、有難きためしに非ずや。人々如何。懸る目出度御代にあひながら、御公儀様より御法度と仰付させらるゝ事を背きて、家をほろぼす者あり。又其身にも相応せざる侈りをきハめつ、家業にをこたりッ。⁽³³⁾

ここで注意したいことは、傍線部のようにいまを「太平の御代」と捉え、こうした太平の世の中であるにもかかわらず、公儀の法度に背き、自身の「家」を減ぼす者もあり、また分不相応の贅沢を極め家業を怠ける者もいると述べている点である。先に引用した「如此の者」たちは、こうした太平の世を生きる幸運に見舞われたにもかかわらず、法令に背いたり、贅沢を極めたり、家業をおろそかにしたりして、その果てに自身の「家」を減ぼしてしまうような人々を指しているのである。

以上の見解をもとにすると、「老い」を否定する根拠として理解されうる『徒然草』第7段をめぐって、老いて成し遂げられる事跡、「忠」と「孝」の実践、「老い」にふさわしい容姿を強調し、そして若いときに勝手気ままに生きることへ警鐘を鳴らす『徒然草摘議』の注釈の背景には、太平の世に生じた老人を嫌悪するという風潮があったのではないかと考えられるのである。

結びにかえて

本稿では、17世紀における「老い」に関する意識を明らかにする一環として、当時の「老い」を捉える意識のベースに『徒然草』にみられる「老い」の捉え方があるということをもとに、「老い」を否定する根拠として理解されうる『徒然草』第7段に焦点をあて、藤井懶斎の『徒然草摘議』に

みられる見解を検討してきた。

『徒然草摘議』の注釈を検討して明らかにしたことは、一言でいえば、「老い」を肯定する意識である。具体的には、老いて成し遂げられる事跡、「忠」と「孝」の実践、「老い」にふさわしい容姿を強調し、そして若いときに勝手気ままに生きることへ警鐘である。このうち、若いときに勝手気ままに生きることへの警鐘については他の注釈にもみられる意識である。しかし、この警鐘を含めて、『徒然草摘議』の第7段に対する論評を貫く「老い」を肯定する意識は、他の注釈書にはほとんどみることのできない特色といえる。さらに、こうした解釈がなされる社会的背景として、太平の世に生まれながら正しい生き方をしない人々の間で老人を嫌悪するという風潮が生じていたことを指摘した。この点については、第7段以外の「老い」に関する見解にも視野を広げて『徒然草』の注釈書全体から「老い」について俯瞰する作業とあわせて、さらなる検討を要するところである。以上の課題を見据えつつ、ひとまず稿を終えることとしたい。

* 本稿は、JSPS 科研費 JP26310105の助成を受けた成果である。

註

- (1) 川平敏文氏は、「江戸期の徒然草注釈書は、概ね十七世紀に集中して述作・刊行されているのである。その数の多さは、他の古典類に比べて群を抜いて」といると指摘している。（『徒然草の十七世紀－近世文芸思潮の形成－』、岩波書店、2015年、44頁）。
- (2) 註（1）前掲書・「はじめに」V頁。
- (3) 註（1）前掲書60頁。
- (4) 『可笑記』（寛永19年・1642年刊行、『仮名草子集成』14、東京堂出版、1993年、207頁）。
- (5) 『河内屋可正旧記』巻13（清文堂出版、1955年、218頁）。
- (6) 『徒然草』第172段の原文は以下の通りである。

若き時は、血氣内に余り、心物に動きて、情欲多し。身を危めて、碎け易き事、珠を走らしむるに似たり。美麗を好みて宝を費し、これを捨てて苔の袂に簞れ、勇める心盛りにして、物と争ひ、心に恥ぢ羨み、好む所日々に定まらず、色に耽り、情けにめで、行ひを潔くして、百年の身を誤り、命を失へる例願はしくして、身の全く、久しからん事をば思はず、好ける方に心ひきて、永き世語りともなる。身を誤つ事は、若き時のしわざなり。老いぬる人は、精神衰へ、淡く疎かにして、感じ動く所なし。心自ら静かなれば、無益のわざを為さず、身を助けて愁なく、人の煩ひなからん事を思ふ。老いて、智の、若きにまされる事、若くして、かたちの、老いたるにまされるが如し。（西尾実・安良岡康作校注『新訂徒然草』、岩波書店、1928年、1985年改版、291頁）

この段では、「若き時」と「老い」が対比的に捉えられ、「若き時」に自分の身を減びして

しまうような危うさを指摘する一方で、「老い」における心の状態を高く評価するという内容となっている。『河内屋可正旧記』に引用された箇所は傍線部であり、「若き時」と「老い」とを端的に比較し、この段をまとめる一文である。

以上のように、『徒然草』には「老い」について様々な捉え方が示されている。こうした多様な「老い」の捉え方のどこに注目するかという点に光をあてることで、江戸期の人々の「老い」の意識のありようを明らかにしていくことができると筆者は考えている。

- (7) むろん当時の「老い」に関わる意識のベースにあったのは『徒然草』だけではない。例えば、林羅山は自身の「老い」を韓愈の詩や馮唐の逸話に重ねて捉える(拙稿「林羅山の死別体験」、東北大学日本思想史研究室+富樫進編『カミと人と死者』、岩田書院、2015年、156頁)。今後、さらに江戸期において「老い」の意識を形作るベースとなっていた先行する書物やフレーズを調査していく必要がある。
- (8) 『徒然草摘議』は、国文学研究資料館高乗勲文庫所蔵(貞享5年刊行)に拠った。なお、『徒然草摘議』の神宮文庫所蔵のテキストが、大坪利絹氏によって翻刻されている(「神宮文庫所蔵『徒然草摘議』翻刻並解説略注、『親和国文』29、1994年)。
- (9) 藤井懶斎については、勝又基氏による詳細な年譜がある(「藤井懶斎考」(一)～(五)、『明星大学研究紀要』(日本文化学部・言語文化学科)第15号～第17号、『明星大学研究紀要』(人文学部・日本文化学科)第19号・第20号、2007年～2009年、2011年、2012年)。
- (10) 『日本随筆大成』第1期・17(吉川弘文館、1976年、195頁)。
- (11) 大坪利絹氏は懶斎の批判は僧侶や仏道、好色是認、内容の論理的相互矛盾にあると指摘している(註(8)前掲論文)。また、川平敏文氏は『徒然草』注釈を17世紀の儒仏論争の展開と関係づけて考察し、『野槌』や『徒然草嫌評判』が思想的・道徳的に反駁した兼好の言説が、加藤磐斎の『徒然草抄』以降には教訓処世の弁、隠逸歌人の風狂が滲み出た言説と捉える傾向へと変化し、こうした注釈に対し、再び思想・道徳の見地から反駁を加えた書として、懶斎の『徒然草摘議』を位置づける。そのうえで、以下のように指摘している。

懶斎が論駁するのは、たとえば第三段など好色を過度に奨励するような言論や、我が国古典文芸の様式でもある「垣間見」という行為の倫理性、そしてやはり、諸縁放下して山林に隠遁すべし呼びかける仏教思想なのである。儒学者である以上、その論点は羅山のそれと重なる部分も多いが、但し同じ儒学者とはいっても、羅山の批判が教義レベルの仏老批判を熱心に試みているのに較べて、懶斎のそれは上に掲げたような「好色」や「垣間見」の問題など、日常道徳的な問題の方に、むしろ多くの言葉を費やしている。(『徒然草の十七世紀－近世文芸思潮の形成－』、岩波書店、2015年、79頁)
- (12) 西尾実・安良岡康作校注『新訂徒然草』(岩波書店、1928年、1985年改版、26頁)
- (13) 『徒然草古注釈大成』(日本図書センター、1978年)

- (14) 『徒然草寿命抄』の注釈は以下の通りである。なお、『徒然草寿命院抄』は松雲堂刊行（1936年）のテキストに拠った。

- 一 ミニクキスカタ 老衰シタルスカタ也。
- 一 命ナカケレハハチヲホシ 莊子天地篇ニ、多男子則多懼、富則多事、壽則多辱、是三者非所以養徳也。

- (15) 『四書章句集注』（中華書局、1983年）。

- (16) 同前。

- (17) 註（13）前掲書。

- (18) 例えば、『徒然草』第58段（道心あらば、住む所にしもよらじ。……）において、懶斎は以下のように述べている。

釈迦の御事はしはらく置ぬ。末徒をもつていはば、仏のまねとて父母をすて家をいてて道をならふとすれと、十とせはたとせか程には成道もしかたけれハ、其あひたに父も母もおほやう死して、一日の報恩だになし。たまたま親のいける世に我道成就せりとおもへるもあれと、そのうつハもの釈迦に及ばで寶積經もえとかざれば、無生法任を得せしめん事もおほつかなし。われより是をミれハ、ただそのまま家にありて孝をつくせる人にハしかず。

ここでは、仏教の教えを学んだ者たちが父母を捨て、出家して、修行に励んでいる間に父母は死んでしまい、親の恩に報いることができなくなってしまうこと、また偶然にも親が生きている間に修行が終わったとしても、釈迦のレベルには到底及ばないことという二つの点から批判がなされている。このように仏教者のあり方についての批判をみると、この第7段において、仏教者の例を出してまで、40歳以降に成し遂げられる優れた人間性を強調することは、懶斎がいかにこの40歳で死んだ方がよいという第7段の主張に対して批判的であったかを物語るものといえるだろう。

- (19) 『近世文学資料類従 仮名草子編16』（勉誠社、1973年）。

- (20) 国立国会図書館蔵。

- (21) 註（14）前掲書。

- (22) 『徒然草大全』は、大坪利絹氏の翻刻に拠った（『徒然草大全：翻刻と解説（一）』、『神戸親和女子大学研究論叢』28、1995年）。

- (23) 『徒然要艸』は早稲田大学図書館古典籍総合データベースに拠った。

- (24) 同前。

- (25) 以上のようなライフサイクルは、17世紀のヨーロッパにおいて作成された「人生の諸年齢」の図像に描かれた頂点の中年期を目指して階段を上り、老衰の段階へと階段を下りていくイメージと酷似する（パット・セイン『老人の歴史』、東洋書林、2009年、159頁～162頁）。17世紀という時期に、日本とヨーロッパとにおいて、類似するライフサイクルが意識されていた

る現象は、「古い」をめぐる東西比較という観点からみて興味深い。

- (26) 『日本随筆大成』 第1期・第17巻、吉川弘文館、1976年、256頁～257頁。
- (27) 註（6）前掲書・162頁。
- (28) 註（26）前掲書・241頁。
- (29) 『徒然草抄』 は、吉澤貞人氏の翻刻に拠った（「加藤磐斎『徒然草抄』:「巻第一」の翻刻」、『金城学院大学論集 国文学編』 40、1998年）。
- (30) 国立国会図書館蔵。
- (31) 註（22）前掲論文。
- (32) 註（5）前掲書。
- (33) 同前。

